垣間見る群像
—町工場の再構築—

R09061　根本雅章
指導教員　澤田英行

Ⅰ. はじめに　—生産と消費—

日常の中心にあった生産の場。作り・使い・食べる生産し消費する流れ。小さな社会が日常の中にあり、それはその場所の文化でもありました。人は生産と消費が密接にあった小さな社会の中で、いつも誰かのおかげで生活しているという当たり前のことを学んでいたように感じます。

Ⅱ. 社会背景　—グローバル化—

グローバル化により、大量消費・大量生産という合理主義が浸透しました。地域産業は衰退し、そこで暮らしを営む人々が地域の技術に触れる機会も少なくなりました。

Ⅲ. 敷地情報　—大田区—

■敷地　羽田国際空港　電車　高速道路

■大田区—大森・羽田地域
今なお、町工場が多く残る大田区。その中でも大森・羽田地域は、大田区を代表するものづくり産業の集積地です。
■消える町工場の風景
グローバル化により工業専用地域を除いた地域において、移転・廃業を理由に工場は減少傾向にあります。こうした工場跡地に集合住宅などの建設が増加し、操業をめぐる紛争が深刻化し、町工場は町に閉じ、かつての町工場を中心とした風景は消えつつあります。
■仲間まわし
地域内で自社だけではできない製品の加工などを複数の工場を回って一つの製品や部品にまとめあげるというネットワークを形成しています。
■羽田空港の国際化
羽田空港の国際化を契機に、海外からの観光客の受け入れを視野に入れ、グローバル展開に不可欠な人材を育成するために外国人を積極的に受け入れています。

Ⅳ. 敷地選定　—廃校舎—

平成 14 年に合併のために廃校になった大森第 6 小学校校舎。児童館を中心に町の人が自由に利用できるコミュニティセンターととして利用されています。

対象敷地：東京都大田区大森西 2 丁目 16-2 大森区立子ども交流センター (旧大森第 6 小学校)　種別：第 2 種住居地域
敷地面積：約 6500 ㎡　容積率：200％　　蔽率：80％

Ⅴ. 提案　—地域から世界とつながる—

かつての町工場を中心とした町の風景を取り戻すと共に、生活の営みの中で育てられた技術と町工場の町特有の風景を表示し、価値け、地域から世界へと発信する建築を設計します。
そこは、町工場であり、町のコミュニティの場であり、世界の人が仕事を依頼に来る場所です。かつてあった町工場を中心とした賑った風景の中に、外国人が加わり、新しい町の賑わいをつくっていきます。

町の人・町工場の人・依頼に来る人の活動が折重なり群像となります。

敷地周辺写真 1

敷地周辺写真 2

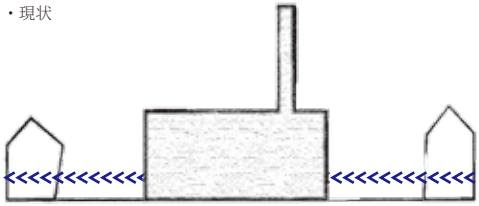
敷地周辺写真 3

参考文献
東京町工場 etta P - 08 (著)　OMA RECENT PROJECT OMA OMA (著), 二川幸夫 (著)

Ⅵ. 設計手法　—垣間見る群像—

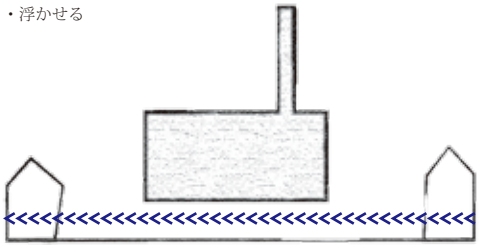
■町工場に人が入り込む余白をつくる

・現状



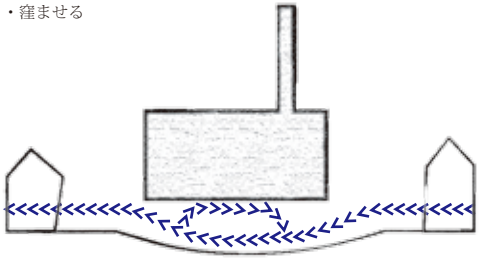
町工場は町に閉じ、かつてのような町工場と町との賑わいはない。

・浮かせる



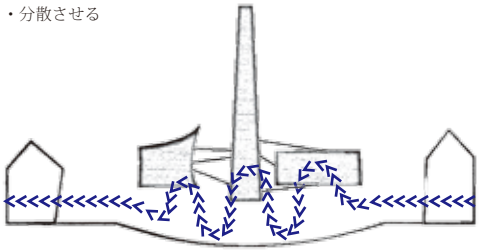
町工場を浮かせ、町との連続性をつくり町の広場のような場所をつくる。

・窪ませる



地面を窪ませて、人々が溜る場所をつくる。

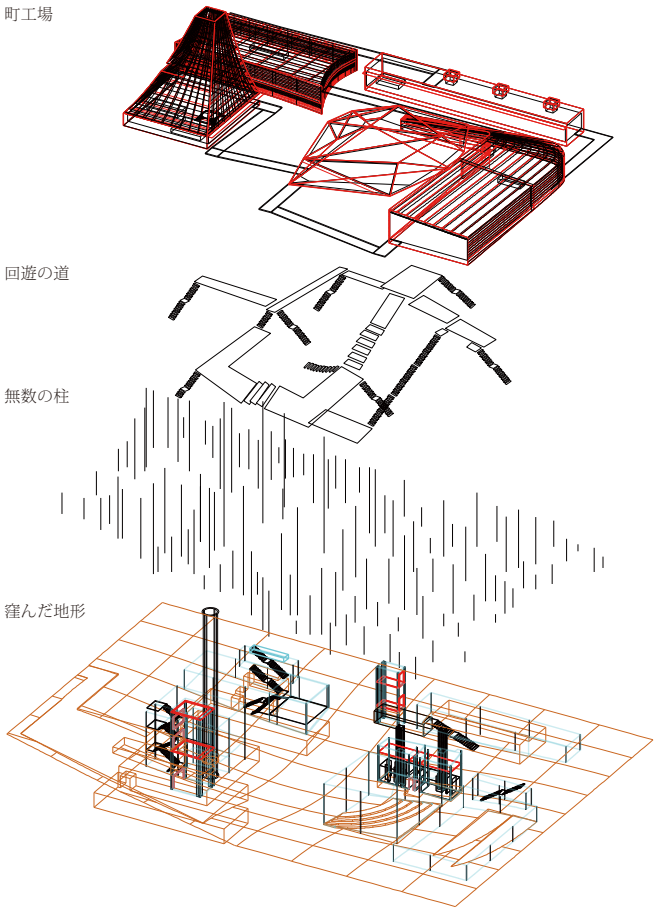
・分散させる

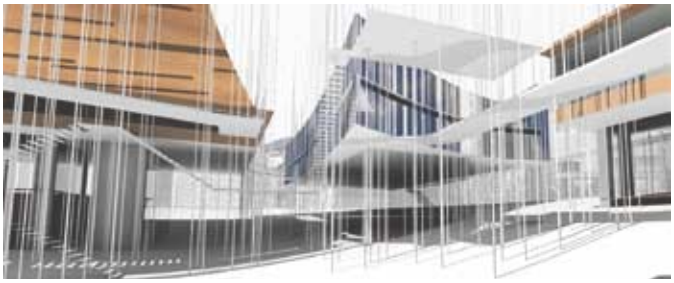


仲間まわしと同じように、町工場を分散させ、人が町工場に入り込む余白をつくる。

※仲間まわし：Ⅲ 敷地情報を参照

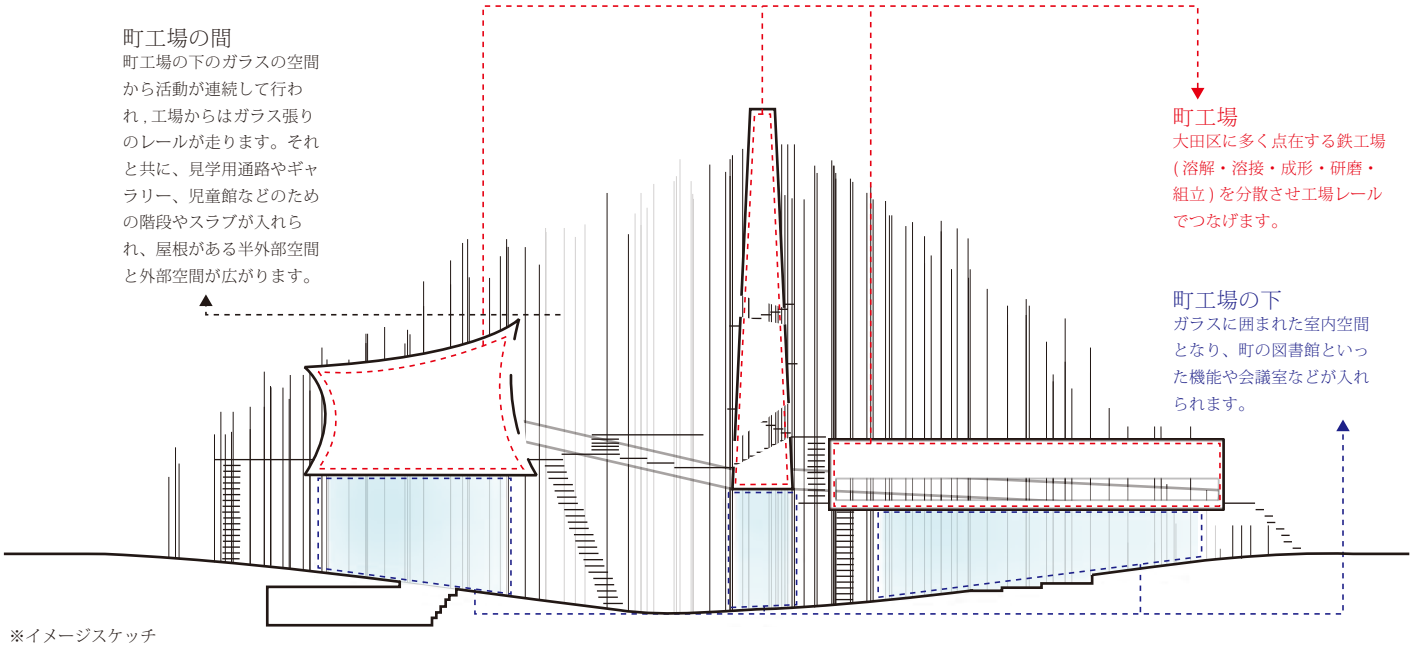
Ⅶ. 構成ダイアグラム





■町の人・町工場の人・依頼に来る人を群れとする

分散し、宙に浮く町工場・工場レールを支える構造体として、細い無数の鉄柱を用います。町工場の下や町工場の間には鉄柱を支えとして、町の人のコミュニケーションの場や依頼者の会議室・見学通路のための階段やスラブが張り巡らされます。鉄柱はやわらかく空間を分けながら、目隠しの役割を果たし、三者の活動を重ね、関わるきっかけをつくります。



※イメージスケッチ